

サリー・マン——家族と風景のスケッチ

Yamada Akiko
山田 明子

サリー・マンはアメリカの南部、バージニア州に生まれ育った女性の写真家である。「生まれてからこのかた、ここでは多くのものが昔のままの姿を保っている」という、山のふもとの小さな丘にある農家に今も暮らすマンは、1984年から91年にかけて、南部の豊かな自然に囲まれた家族との暮らしを、8x10インチの大型カメラを使ってモノクロームで撮影した。

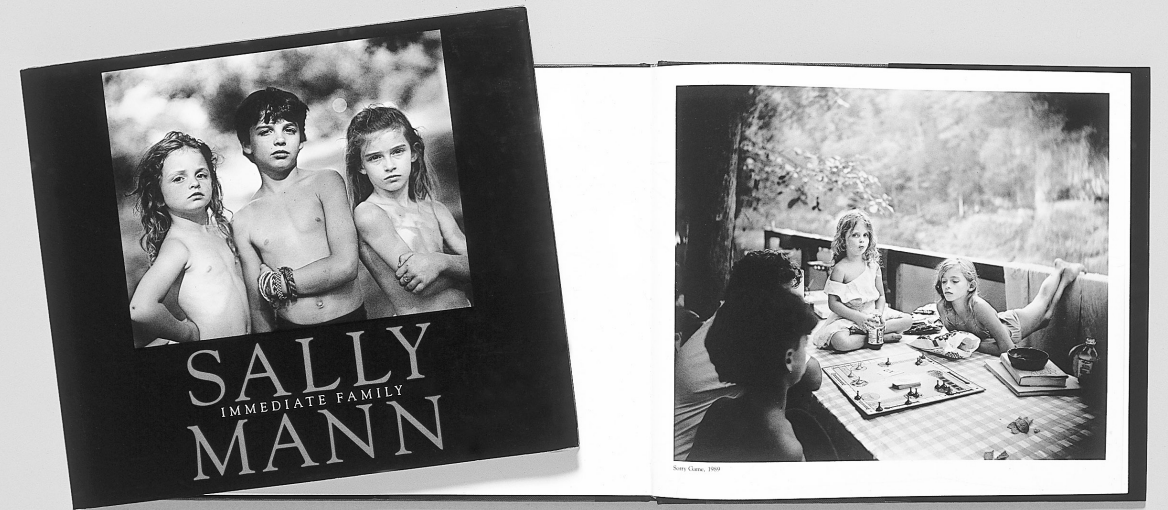
「小屋の周りでは、川はその住人たちの習性と同様、流れを変えてはいない」と語るサリー・マンは、夫と3人の子供たちとの暮らしを写真にした。ゆったりとした時の流れのなかで遊びに興じる子供たち。祖母と同じ名を受け継いだ子供、マンが母に作ってもらった晴れ着を着た子供、病気の祖父を見舞う子供たち。マンの写真に登場する家族それぞれが縦糸となり横糸となり、時間と複雑に絡み合いながら、家族のいる風景というタペストリーを織り上げている。丘や、水や、木や、人が、それぞれ断片となってちりばめられている一片の詩のようでもある。これらの写真は『Immediate Family』(1992年)というタイトルでまとめられ、彼女はいちやくアメリカをはじめ日本でもよく知られる写真家の一人になった。

サリー・マンの作品が見る人に強い印象を与えたのは、それが天真爛漫な子供たちの生活をとらえた写真だっただけでなく、家族の肯定と時代を超えた繋がり、深さが彼女の写真の中に溢れていたからだ。経済の低迷期から転じて、好景気にわく消費経済社会へと大きな変化をとげた1980-1990年代のアメリカにおいて、経済の繁栄は同時に個人主義の歪みをもたらす

ことになった。このような社会にあって、保守的な考えを色濃く残す南部を舞台に、家族を見つめて制作されたマンの写真は、家族のありようを思い起こす機会になった。人々は、家族を単位とした、保守的ではあるが自由なアメリカの良心というべきものをマンの写真の中に見ていたと言ってもいいだろう。

『Immediate Family』の作品は8x10インチ(およそ20x25センチ)のネガを使用する大型カメラで撮影され、20x24インチのサイズに引き伸ばされてプリントされている。優しい光につまれた美しい写真の数々である。8x10は19世紀から使われていた大型カメラの原型ともいえるカメラであるが、機材が大きいだけに、重く、操作が難しく不便で、そう簡単に撮れるものではない。ましてや、プリントも20x24インチのサイズになると暗室での取り扱いが難しい。しかし、家族の写真を撮る時にマンは敢えてこの大型カメラを使って、写真を創り出していった。「大型カメラは操作が難しいし、フィルムの現像やプリント処理も難しいので、8x10で撮ることへの尊敬の念が常に私の中にあつたのです。」とマンは語っている。「8x10のカメラはスナップショットの領域ではないけれど、家族の写真は楽にさり気なく撮ったように見える写真であってほしいと思いました。8x10で撮っていても35ミリのカメラで撮ったスナップショットのように見える写真が好きでした。」

サリー・マンの作品は世界各国で展示されており、自身の作品を語る講演会もまた各地で行われている。日本でまとまった数の作品が初め



photograph copyright © Sally Mann

で紹介されたのは1993年のことであるが、その展覧会を期に来日したマンは、3人の子供のうち一人を連れて来ていた。講演会や写真展のために旅行をする時は、色々なものを見せてあげたいからと、一人ずつ交代に連れてくるのだという。その時順番が回って来たのは長女ジェシーだった。現在24歳になる彼女は絵描きになり、彼女もまた母が歩んだ「ものを作る道」を歩き始めた。「母は、ものごとに眼をつぶるということができないの。いつも身近にあるものをしっかりと見据えていくのだと思う」とジェシーは語っている。

サリー・マンが、子供はいずれ自分のもとを離れ、自分自身もまた子供から離れていくことになる、と強く意識していたように、子供たちの成長を捉えたシリーズは、ゆるやかな時間の流れの中で子供たちがそっと置かれた風景の写真になり、やがて風景そのものへと移り変わっていった。1997年には、マンが生まれ育ち家族とともに生活するバージニア州やジョージア州の風景を捉えたシリーズ『Mother Land』を発表、続いて、ミシシッピ州やルイジアナ州の湿気を帯びた特徴のある風土を捉えたシリーズ『Deep South』を1998年に発表している。

2000年から取り組んでいたアメリカ南部の歴史的な場所を捉えた風景の撮影は2004年に完了し、マンの作品は、彼女と家族を育んだ風景へと還っていき、幾多の歴史に彩られたアメリカの風景へとさらなる広がりをもつようになった。

写真の背景にはその写真家が歩いて来た道があり、写真には写真家の思いが現れている。「眼の前にある心引かれるものを撮っているだけ」とさり気なく語る写真家の言葉は多くの示唆に富んでいる。なによりも、写真家の生き様のようなものがそれとなく感じられる写真は素敵だ。家族を捉えたサリー・マンの写真は、かけがえのない家族の存在や、年月、世代の繋がり、風土、こういったものを強く感じさせる豊かな写真である。

サリー・マン
1951年アメリカ、バージニア州生まれ。1975年ホーリンズ・カレッジより文学の修士号取得。2001年「タイム」誌のAmerica's Best Photographerに選ばれた。作品は、ニューヨーク近代美術館をはじめとするアメリカ各地の美術館に収蔵され、日本では東京国立近代美術館、東京都写真美術館に収蔵されている。

『Immediate Family』
1992年 Aperture社(英語版)
1993年 トレヴィル社(日本語版)ハードカバー